２０１３年度学生実態調査報告書

1. 単年度調査結果

監　　修：社会学研究室　嶋崎　尚子
集計分析：文学研究科社会学コース博士後期課程 3 年　高橋　かおり
発　　行：文学学術院（2013 年 11 月）

2013 年度　学生実態調査　調査報告書

目次

第1章　調査概要 **3**
1-1　調査のねらい 3
1-2　調査デザイン 3
1-3　基本属性 5
1-4　居住状況、回答デバイス 7
第2章　学習活動 **9**
2-1　授業への取り組み方 9
【問４：表 2-1～7】 9
第3章　基礎教育・外国語教育 **10**
3-1　基礎講義（１・２年生対象） 10
【問５：表 3-1】 10
【問６：自由回答：付録①】 10
3-2　必修基礎演習　（１・２年生対象） 10
【問７：表 3-2～4】 10
【問８：表 3-5】 12
【問９・10：表 3-6・7】 12
【問 11：自由回答：付録②】 12
【問 12～13：表 3-8～13】 14
【問 14：自由回答：付録③】 15
3-4　基礎外国語（１・２年生対象） 16
【問 15～18：表 3-14～21，参考表 3-1】 16
【問 19：自由回答：付録④】 17
3-5　選択外国語（３・４年生対象） 18
【問 20～24:表 3-22～26】 18
【問 25：自由回答：付録⑤】 19
3-6　開講科目 19
【問 26・27：表 3-32～33】 19

第4章　文化構想学部:進級、専門教育 21
4-1　論系への進級 21
【問 28～30：表 4-1～3】 21
【問 31：表 4-4～7】 21
【問 32～36：表 4-8～12】 22
4-2　専門教育 22
【問 37～44：表 4-13～19】 22
【問 45～47：表 4-20～22】 23
第 5 章　文学部:進級、専門教育 24
5-1　コースへの進級 24
【問 48～51：表 5-1～7】 24
【問 52～55：表 5-8～11】 24
5-2　卒業論文・満足度 25
【問 56～57：表 5-12～16】 25
第6章 キャンパスでの生活:施設利用・学習環境・大学への愛着 26
6-1　留学・授業外での学習状況 26
【問 58～59：表 6-1～2】 26
【問 60～78：表 6-3～5】 26
6-2 大学施設等の利用 28
【問 63：表 6-6～14】 28
6-3　33 号館高層棟の利用状況、環境評価 29
【問 64・65：表 6-15～22】 29
【問 66：自由回答：付録⑥】 30
6-4　大学・学部への愛着 31
【問 67・68：表 6-23～24】 31

第１章　調査概要

1-1　調査のねらい

本調査は、2007 年度に発足した文化構想学部・文学部の学生を対象に、新設学部での学生の学習や生活について、その実態や意識を把握することを目的に、2009 年度から文学学術院が継続的に実施している。2013 年度調査は、第５回目の調査である。調査実施にあたっては、彼らの学部での学習活動、進級状況、キャンパスでの生活全般（33 号館の状況、工事の影響も含む)、その実態と意識を明らかにする質問項目を用意した。

なお、本年度から回答率の低さへの対策として、次の２点の改善を図った。第一には、スマートフォンでも回答が可能な web 調査とした。そして第二に、スマートフォンでの回答に対応するため、質問数を大幅に削減した。

本章末で示すように、全体の 45％がスマートフォンでの回答であり、この対応は効果があったと判断できる。しかし残念ながら、回答率は昨年度のそれを下回る結果であった。来年度に向け、調査時期・方法など引き続き検討が必要である。

1-2　調査デザイン

(1)　対象

本調査の母集団は、2013 年度の文化構想学部および文学部在籍者（1～4 年生）総数 7,153 名（休学者を除く）とし、調査対象者は、１年生は２分の１、２～４年生は４分の１の割合で無作為抽出した 2,678 名である。

(2)　調査方法

本調査は、調査依頼文と ID をメールで配信し、調査対象者が配信された ID を用いて調査画面にアクセスし、調査に回答する Web 調査で実施した。調査回答後、抽選で 236 名に謝礼品をわたした。調査 Web 画面では無記名自記式であるが、謝礼品抽選・贈呈にあたっては、ID と学籍番号をリンクさせた。なお、この点については、調査依頼時に調査対象者の了解を得た。

(3)　調査実施

調査画面の作成、配信から回収・データ作成までの工程は（社）中央調査社に委託して行った。委託にあたっては、「個人情報保護に関する覚書」を本学術院と中央調査社で交わし、個人情報の秘密保持を確認した。なお回収した調査票データは、文学学術院が厳重に管理している。

(4)　調査デザイン

次ページ図を参照のこと。

(5)　調査手順・実施時期

・調査票作成　2013 年６月
・個人情報保護委員会　2013 年６月早稲田大学個人情報保護委員会へ申請し、実施許可を得た。
・調査依頼の配信　2013 年７月 16 日
・調査期間　2013 年７月 17 日～2013 年７月 31 日
・調査回答礼状・督促状の配信　2013 年７月 23 日、７月 29 日

Ⅰ学習・研究活動

A 授業(それぞれの科目について)

(1)授業への取り組み方　7項目

Bカリキュラム

(1)基礎教育
- (1)-1基礎講義
- (1)-2基礎演習
- (1)-3選択基礎演習

(2)英語
時間数・効果

(3)基礎外国語
時間数・選択語学・選択理由・効果

(4)選択外国語
履修の有無・選択語学・選択理由・効果・未履修理由・要望

C学部システム

(1)進級システム・
- (1)-1　論系
- (1)-2　コース

(2)科目登録

(3)専門教育

Ⅱ　学生生活全般

A　大学利用

(1)留学

(2)授業外での学習

(3)施設利用頻度　9施設

(4)33号館授業環境評価　6項目

B　大学・学部への愛着

(1)愛着

Ⅳ基本属性

A個人属性

(1)所属学部・論系・コース

(2)学年

(3)性別

(4)親元か否か

(5)回答デバイス

文化構想学部・文学部学生実態調査2013　調査デザイン

（6）回収状況

2013 年 6 月 17 日現在の 1 ～ 4 年生の在籍者から抽出した 2,678 名に調査依頼し、有効回収数は 561 票、有効回収率は 20.9%であった。また、学部ごとにみると文化構想学部では 19.0%、文学部では 23.5%である。

全体の回収率は昨年度の 23.1%よりは低く、これまでの調査の中で最低の回収率であった。有効回収率は例年とおり低学年ほど高い。1 年生では文化構想学部 27.1%、文学部 33.7%であった。ただしこの割合でも昨年度調査のものよりそれぞれ 5 ポイント以上回答率は低い。また、4 年生では回収率が 15%を切っており、非常に低い。

なお、1 年生のみ 50%抽出であること、回答率は両学部とも 1 年生が最も高いことから、本回答者数においても 1 年生の占める割合が高いことには注意が必要である。

表 1　対象者・回収率一覧

学部	学年	母集団	抽出割合	対象者数	回答者	回収率
合計		7153		2678	561	**20.9%**
文化構想学部	全体	4023		1507	286	**19.0%**
	1年	1034	50.0%	517	140	27.1%
	2年	960	50.0%	480	80	16.7%
	3年	1005	25.1%	252	36	14.3%
	4年	1024	25.2%	258	30	11.6%
文学部	全体	3130		1171	275	**23.5%**
	1年	772	50.0%	386	130	33.7%
	2年	777	50.1%	389	75	19.3%
	3年	778	25.1%	195	39	20.0%
	4年	803	25.0%	201	31	15.4%

1-3　基本属性

回答者中の割合は以下のとおりである（以下表中カッコ内の数は実数である）。

まず次の図表では全体に対する学部・学年ごとの率を示した。

表 2　学部・学年ごとの回収率

		計	1年	2年	3年	4年
全体	n	561	270	155	75	61
			48.1%	27.6%	13.4%	10.9%
文化構想学部	n	286	140	80	36	30
		51.0%	25.0%	14.3%	6.4%	5.3%
文学部	n	275	130	75	39	31
		49.0%	23.2%	13.4%	7.0%	5.5%

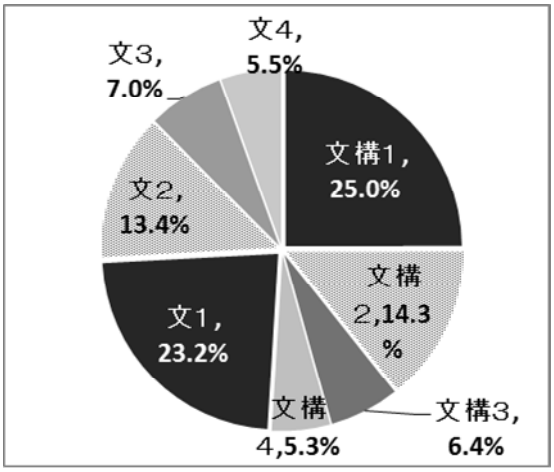

図 1　学部・学年ごとの回収率

以下の２つの表は所属論系・所属コースごとの学年別の割合である。ただし回収数が少ないためこれらの表の値は参考にとどまる。

表 3　論系ごとの回収率（文化構想学部）

		所属論系［%・実数］											
	n	多元文化論系		複合文化論系		表象・メディア論系		文芸・ジャーナリズム論系		現代人間論系		社会構築論系	
合計	146	17.1%	25	18.5%	27	17.1%	25	11.0%	16	15.8%	23	19.9%	29
２年	80	18.8%	15	17.5%	14	17.5%	14	11.3%	9	15.0%	12	18.8%	15
３年	36	13.9%	5	13.9%	5	22.2%	8	8.3%	3	25.0%	9	16.7%	6
４年	30	16.7%	5	26.7%	8	10.0%	3	13.3%	4	6.7%	2	26.7%	8

表 4　コースごとの回収率（文学部）

		所属コース［%・実数］											
	n	哲学		東洋哲学		心理学		社会学		教育学			
合計	116	4.3%	5	2.6%	3	14.7%	17	16.4%	19	9.5%	11		
２年	41	9.8%	4	4.9%	2	29.3%	12	14.6%	6	12.2%	5		
３年	36	2.8%	1	2.8%	1	11.1%	4	11.1%	4	13.9%	5		
４年	39	0.0%	0	0.0%	0	2.6%	1	23.1%	9	2.6%	1		
	n	日本語日本文学		中国語中国文学		英文学		フランス語フランス文学		ドイツ語ドイツ文学		ロシア語ロシア文学	
合計	116	12.9%	15	1.7%	2	15.5%	18	2.6%	3	1.7%	2	2.6%	3
２年	41	19.5%	8	2.4%	1	24.4%	10	2.4%	1	2.4%	1	0.0%	0
３年	36	11.1%	4	2.8%	1	11.1%	4	0.0%	0	2.8%	1	5.6%	2
４年	39	7.7%	3	0.0%	0	10.3%	4	5.1%	2	0.0%	0	2.6%	1
	n	演劇・映像		美術史		日本史		アジア史		西洋史		考古学	
合計	116	6.9%	8	9.5%	11	11.2%	13	2.6%	3	6.0%	7	4.3%	5
２年	41	12.2%	5	9.8%	4	9.8%	4	7.3%	3	12.2%	5	9.8%	4
３年	36	5.6%	2	13.9%	5	11.1%	4	0.0%	0	2.8%	1	0.0%	0
４年	39	2.6%	1	5.1%	2	12.8%	5	0.0%	0	2.6%	1	2.6%	1

また、回答者中の男女比は次に示す表のとおりである。性別について無回答（NA）が多いのは、最後まで回答をしない回答者も集計に含まれること、また性別の設問が調査の最後に設置されていたことなどの要因による。

表 5　性別ごとの回収率

	性別(% 実数)						
	n	男性		女性		NA	
全体	561	36.0 %	202	58.8 %	330	5.2 %	29
計	286	32.5 %	93	63.3 %	181	4.2 %	12
1年	140	29.3 %	41	67.1 %	94	3.6 %	5
2年	80	40.0 %	32	56.3 %	45	3.8 %	3
3年	36	36.1 %	13	52.8 %	19	11.1 %	4
4年	30	23.3 %	7	76.7 %	23	.0 %	0
計	275	39.6 %	109	54.2 %	149	6.2 %	17
1年	130	40.0 %	52	53.1 %	69	6.9 %	9
2年	75	36.0 %	27	54.7 %	41	9.3 %	7
3年	39	41.0 %	16	56.4 %	22	2.6 %	1
4年	31	45.2 %	14	54.8 %	17	.0 %	0

1-4　居住状況、回答デバイス

回答した学生のうち、62%が親元で暮らしている。高学年になるほど親元から離れて暮らす学生の割合が高い傾向がみられる。

表 6　問 91　居住形態

		住まい			
		n	親元で暮らしている	て暮らしている	NA
*	全体	561	62.2	31.7	6.1
文化構想学部	計	286	62.6	32.2	5.2
学年	1年	140	62.1	32.9	5.0
	2年	80	70.0	26.3	3.8
	3年	36	61.1	30.6	8.3
	4年	30	46.7	46.7	6.7
文学部	計	275	61.8	31.3	6.9
学年	1年	130	64.6	26.9	8.5
	2年	75	58.7	32.0	9.3
	3年	39	64.1	33.3	2.6
	4年	31	54.8	45.2	.0

また、本年度の調査より、スマートフォンでの回答も可能になった。実際の回答デバイスの状況をみると、全体の 41%がスマートフォンから回答していることがわかる。文化構想学部の学生の方がスマートフォンでの回答の割合が高く、３年では半数を超える。

表 7　回答デバイス

		回答デバイス		
		n	PC	スマートフォン
*	全体	561	59.2	40.8
文化構想学部	計	286	55.2	44.8
学年	1年	140	57.1	42.9
	2年	80	55.0	45.0
	3年	36	47.2	52.8
	4年	30	56.7	43.3
文学部	計	275	63.3	36.7
学年	1年	130	64.6	35.4
	2年	75	54.7	45.3
	3年	39	61.5	38.5
	4年	31	80.6	19.4

第２章　学習活動

2-1　授業への取り組み方

【問４：表 2-1～7】

今年度春期の授業への取り組み方を７項目から評価してもらったところ、全体の傾向としては昨年度と同様であった。最も「あてはまる」の割合が高かったのは「D. 授業で出された課題をきちんと提出している」で 74%であった。「あてはまる」と「ある程度当てはまる」を合計した割合（「あてはまる（計）」）をみても同様に、「D. 授業で出された課題をきちんと提出している」（96%）が最も高く、ついで「B.良い成績を目指している」（85%）、「E.授業中のグループワークやディスカッションに積極的に参加している」（82%）、「A.無遅刻・無欠席を目指している」（76%）、「G 授業を他の活動より優先している」（74%）、「F.必要な予習や復習をした上で授業に参加している」（64%）である。

「あてはまる（計）」は、文化構想学部と文学部の間に大きな差はみられないが、いずれの項目においてもわずかながら文学部の方がその割合が高い。また、「F.必要な予習や復習をした上で授業に参加している」と「G 授業を他の活動より優先している」は低学年ほど「あてはまる（計）」が高い。

逆に「あまりあてはまらない」と「あてはまらない」の合計（「あてはまらない（計）」）が過半数を超えたのは「C.授業内容について、教員に積極的に質問している」（61%）の１項目のみである。両学部ともに、１年での「あてはまらない（計）」が最も高い（文化構想楽部 59%、文学部 56%）。

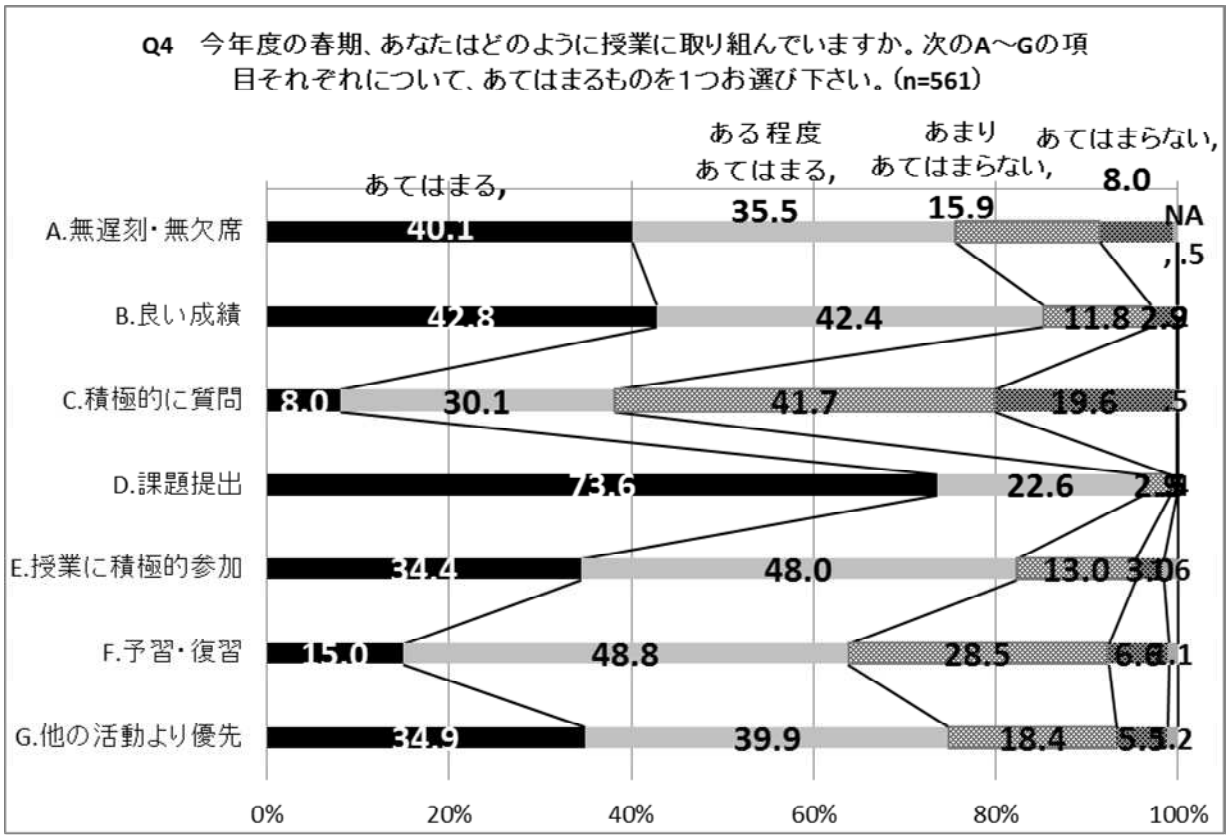

図 2　問４　授業への取り組み方

第３章　基礎教育・外国語教育

3-1　基礎講義（１・２年生対象）

【問５：表 3-1】

オンデマンドの視聴による理解度は、昨年同様全体に高いとはいえない。「十分に理解できた（できている）」とする者は全体の９％にとどまる。しかし「ある程度理解できた（できている）」とする者は７割を越え、「まったく理解できなかった（できてない）」とする学生はほとんどいないため、おおむね学生には理解されていると考えられる。

【問６：自由回答：付録①】

基礎講義に関する自由回答は 166 件よせられた。内容を大きく分けると①コンテンツの長さ・視聴数について、②情報や内容について、③音声・映像について、③レビューシート・評価システムについて、に分けられる。

①については、「視聴数が 30 と多い一方で、一つのコンテンツの時間が長い」という意見が多数よせられた。多く見なければならないことから、様々な論系やコースについて知る機会をえた、という肯定的意見もある一方で、すでに進級希望先が決まっている学生にとっては多い数であり、興味があったとしても作業化してしまうという意見があった。

②の内容や情報については、コース・論系ごとに講義形式のものとガイダンス形式のものが混在しており統一してほしいという意見、また資料があったほうが理解は進む、といった意見がよせられた。他方昨年から増加している意見としては情報や内容の古さを挙げる学生もいる。学部が新設されてから７年がたったが内容や情報が新しくなっていないコースや論系もあるのでは、という意見は今年もあった。

③の音声や映像については、②とも関連することである。というのも、ここ数年で PC の音声映像環境の革新が進んでいるため、過去のコンテンツそのままだと「古い」「音声が聞き取りにくい」といった意見が目立つようになってきた。さらに、映像内にチャプターがあることにより部分的な聞き取りや巻き戻しが可能になるという意見もあり、見やすい工夫がされているほうがより理解が深まるものと考えられる。

④の評価についての意見をまとめれば、レビューシートの 100 字はコンテンツの内容によっては書きにくいという意見や、レポートの評価を可・不可だけではなく細かく採点をしてほしいという意見がよせられた。

全体としては例年とおりの傾向の意見がよせられたといえる。基礎講義の位置づけがコースや論系ごとに違うために、学生側でも受け止め方が異なり、評価が分かれているといえる。

3-2　必修基礎演習　（１・２年生対象）

【問７：表 3-2～4】

基礎演習で身についた能力について、「とても身についた」とする評価の割合がもっとも高いのは、「論文を執筆する能力」の 13%であり、「とても身についた」と「ある程度身についた」の合計（「身についた（計）」）では 63%である。ついで「論文を読解する力」は「身についた（計）」60%、「討論する能力」については「身についた（計）」45%である。学部ごとに大きな差は見られない。また文化構想学部の「論文を執筆する能力」以外では、

１年の方が「身についた（計）」と答えた学生に割合が高い。

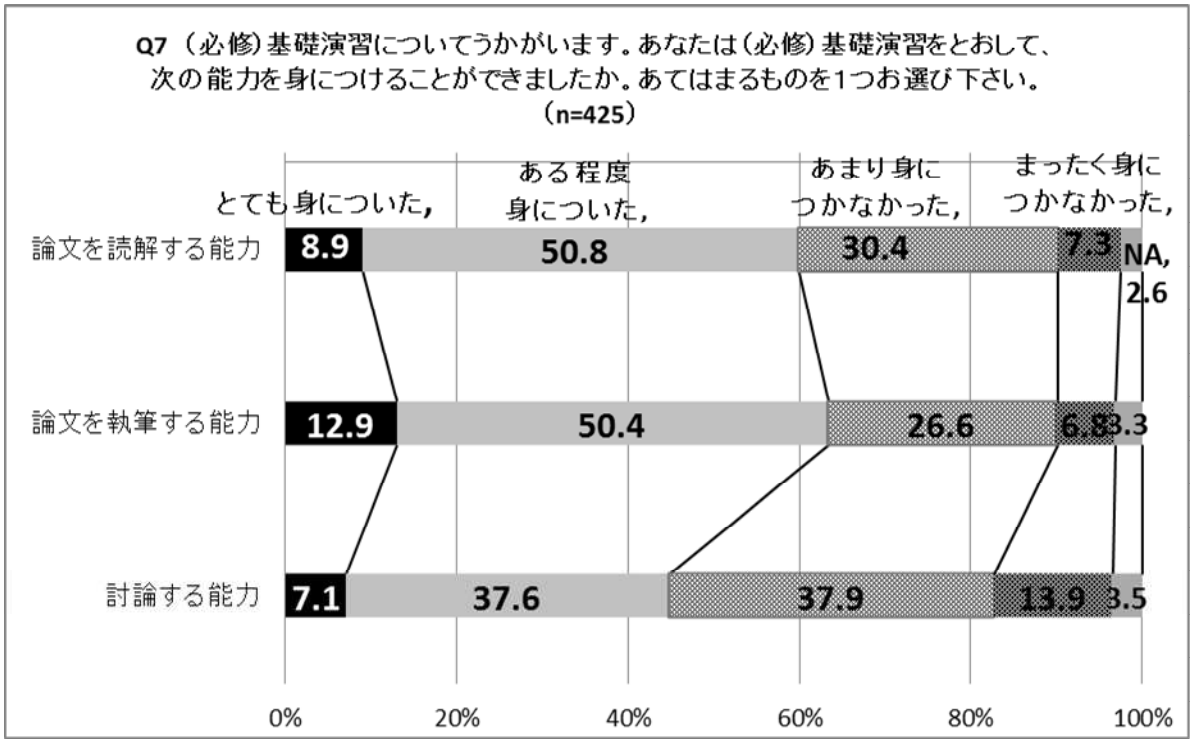

図 3　問７　基礎演習で身についた能力

ここで参考までに、本調査の初回から今回（第５回）にいたるまで、基礎演習で身につけた能力についての回答を年度ごとに比較してみよう。１年生は履修が終了していない段階での回答に当たるため、各年度２年生の回答を抽出して比較を行った。

参考図１では、「とても身についた」と「ある程度身についた」を合計した割合を書く能力ごとに示した。全体の傾向といては、学部新設期に比べて、現在の方が基礎演習を通じて能力を身に着けたと回答する２年生の割合が増えていることがわかる。特に、「討論する能力」は 2009 年度に比べて 2013 年度では 10 ポイント以上上昇していることがわかる。

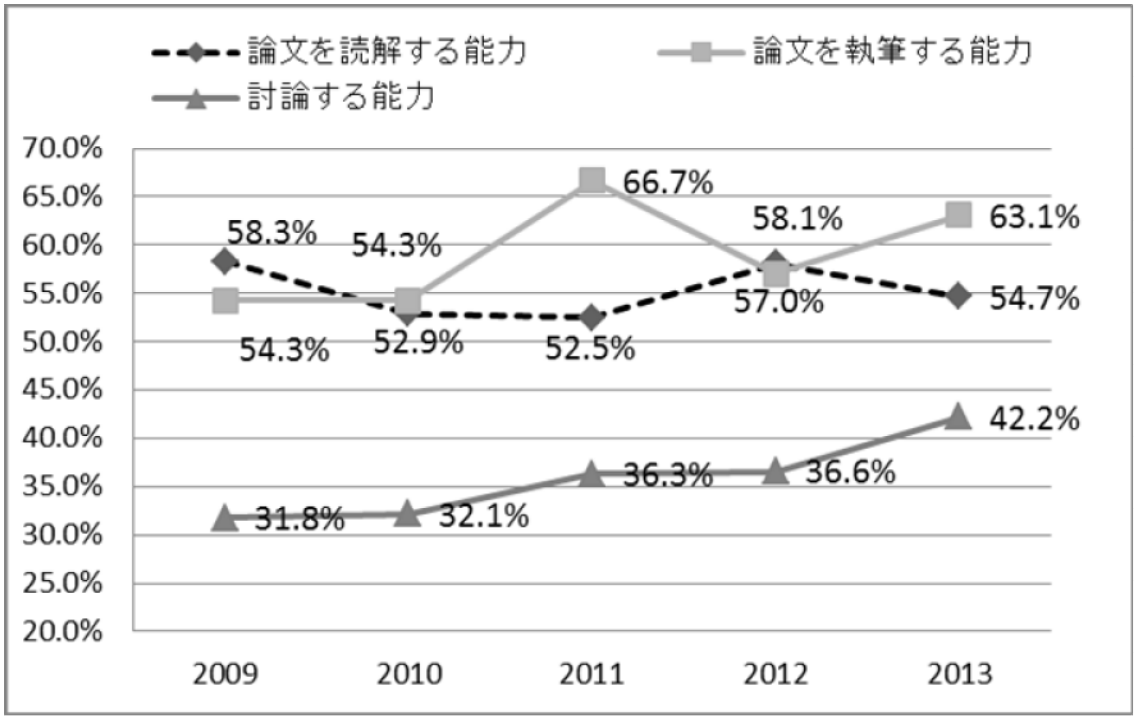

図 4　基礎演習で身に着けた能力（２年生の回答）　年度ごとの比較

【問８：表 3-5】

必修基礎演習を通じて身につけた能力への満足度は「非常に満足をしている」が 10%、「まあ満足をしている」が 45%であり、両者を合わせると 55%である。

【問９・10：表 3-6・7】

必修基礎演習への満足の理由としては「クラスの仲間とのグループ学習」の割合が最も高く、60%である。ついで「担当教員の手厚いサポート」50%、「開講時期が入学直後であったこと」35%と続く。特徴としては、文化構想学部 1 年で「クラスの仲間とのグループ学習」の割合が 73%と高いことがあげられる。

他方、不満理由としては「担当教員のサポート不足」56%、「興味をひかない教材群」43%であった。担当教員については満足要因とも不満要因とも 5 割程度であることから、個々の演習によって異なる教員の対応が、学生の満足度に影響を及ぼしている。これは例年とおりの傾向である。

また問 14 の「その他」(17%) によせられた自由回答 (29 件) の内容は大きく分けると、①論文執筆・読解機会の少なさ、②教員の指導への不満、③クラス間の内容や質のばらつき、④自らの能力・努力不足、となる。

【問 11：自由回答：付録②】

必修基礎演習の内容や方法に関しての意見は 152 件よせられた。昨年度報告書において本問の全体的な傾向を、「各クラス・各担当教員によって特色は必要であるものの、課題の回数・量・提出期限、あるいは基本的な指導内容や方法など形式面での統一は必要である」とまとめたが、この傾向に大きな変化はない。また、問 13・14 の「その他」の自由回答

も、問 15 の自由回答と重なる内容がほとんどである。

特に教員間のばらつきという点は本調査開始時より毎年多く寄せられる意見である。クラスごとのばらつきについては、教員が求めるレベルや課題の違いや、教員の専門に内容が偏っているなど、の具体的な指摘があった。「ランダムに振り分けられたクラスによって学生が教わる内容やレベルの差があることは不公平である」というという意見も複数あった。特に内容や専門分野については「自分で選択をしたい」という意欲を持つ学生が多い。

また、とりわけ本年度の自由回答の中で多かった意見は「レポートや論文の書き方」に関するものである。「書き方を教えてもらえてよかった」という肯定的な意見と、「もっと教えてほしかった」という否定的な意見が両方よせられた。これは個人の受け止め方の差もさることながら、やはりクラスごとの内容や方針の違いの反映であるといえる。よせられた意見は「もっと教えてほしかった」というもののほうが多い。

さらに、半年という開講期間の短さへの不満もある。春期だけ週 1 回という現行の制度では不十分であり、通年授業であってほしいというという要望がよせられた。

肯定的な意見としては、「教員のサポートや少人数のクラスであることによって、大学で居場所を見つけることができた」、「友人を作ることができた」、「大学において必要な力がついた」などの意見があった一方、否定的な意見ではそもそもの基礎演習の必要性を厳しく問う意見もよせられた。

3-3　英語（１・２年生対象）

【問 12～13：表 3-8～13】

1 年次春期の英語については、授業数を「ちょうどよい」とするものは 38%であった。「多い（計)」の割合は全体では 10%であるのに対して、「少ない（計)」は 49%と半数近くにのぼる。

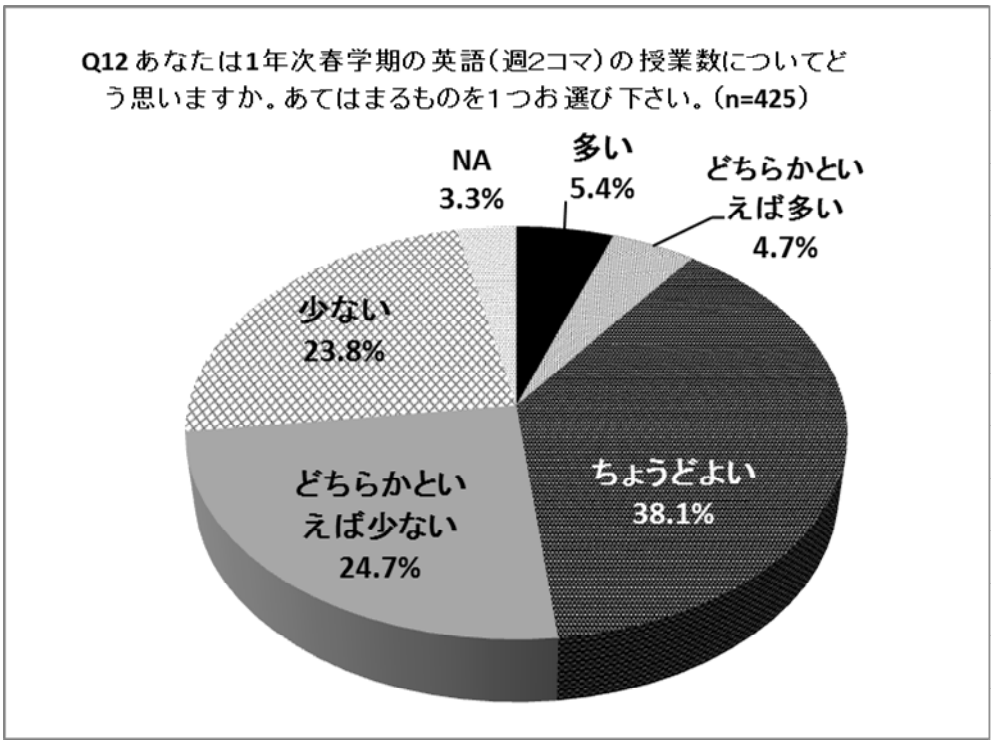

図 5　問 12　英語のコマ数

英語の授業をとおして身についた能力としては、「身についた（計)」をみると、「リスニング能力」が 60%、ついで「ライティング能力」63%、「スピーキング能力」59%であった。入学以前から身につけていたと考えられる「リーディング能力」は「身についた（計)」49%、「身につかなかった（計)」47%とほぼ半々であり、「文法の理解」（67%）は「身につかなかった（計)」とする割合のほうが 67%と高い。

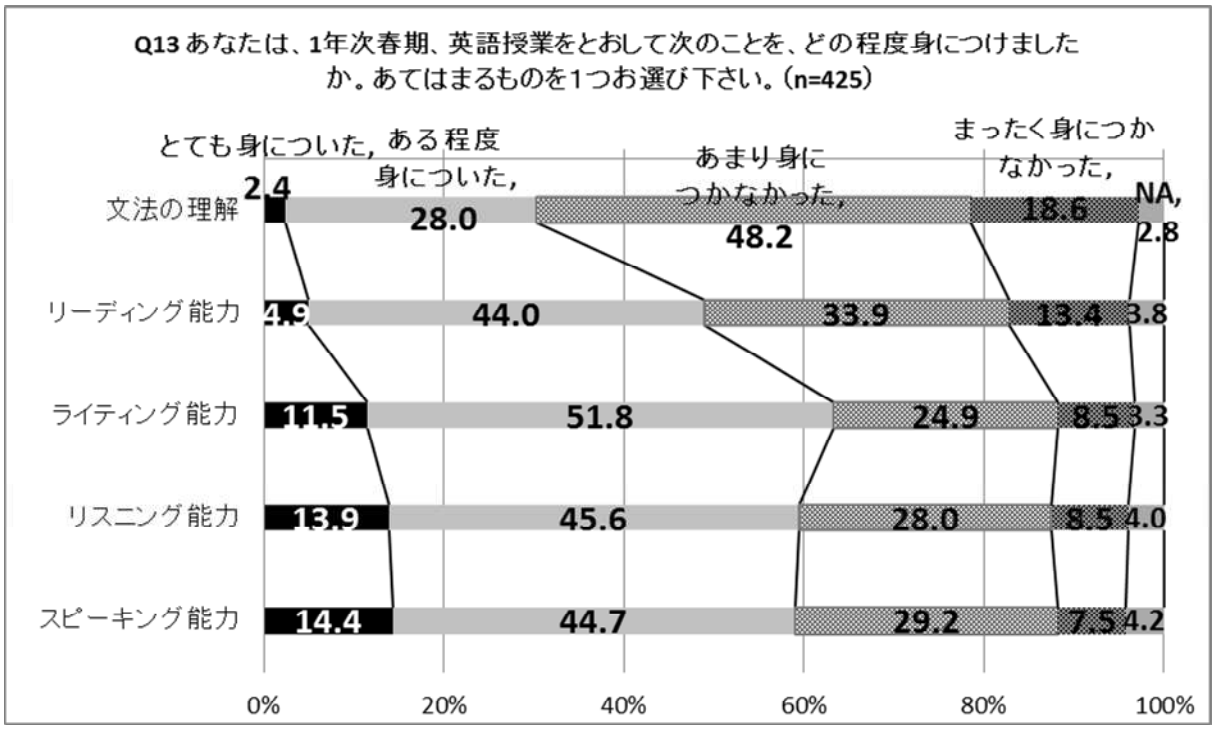

図 6　問 13　英語授業を通じて身につけた能力

【問 14：目田回答：付録③】

１年次の英語授業や選択英語については、計 154 件の意見がよせられた。

全体としては例年同様、授業に物足りなさを感じる学生が多い傾向にある。その理由としては、「クラスごとのばらつき」、「授業の質」、「開講時間数の少なさ」の３つが大きな要因としてあげられる。

まずクラスごとのばらつきについては、「ネイティブの教員と日本人教員で求めるレベルや授業の雰囲気が違う」こと、課題や教材の違いなどについて不公平を感じている学生が多かった。自分に合ったレベルの教員の授業を受けたいという意見もあった。

さらに授業の質については、「全体として求められているレベルが低い」こと、「個人の能力に合わせてレベルごとにクラス分けをしてほしい」ということ、「どの能力を向上させるべきか目的をはっきり持ってほしい」ということ、特にスピーキングやライティングに重点を置いてほしいなど、現状への不満と具体的な要望が多くよせられた。また、受験英語との落差を指摘する学生もいる。

他方、基礎外国語のコマ数と比較して英語科目のコマ数の少なさについての意見も多くみられた。「現状の授業数では英語力の向上を目指すことが難しい」という不満や、「もっと英語科目を充実させてほしい」という要望もよせられた。

また、選択英語については、「開講数が多いため実際のレベルが分かりにくい」、「選外が多い」という意見がよせられた。

授業内容全体についての意見をみると、スピーキングや会話、ディスカッションなどについて力がついたと回答し、文法中心の受験英語との差異を肯定的にとらえる意見も多い。他方、「身につかない」、「意味がない」とする学生も一定数存在する。

3-4　基礎外国語（１・２年生対象）

【問 15～18：表 3-14～21，参考表 3-1】

基礎外国語のコマ数（週４コマ）について、「多い」とする学生が 26%、「どちらかいえば多い」が 33%、両者をあわせると 59%である。ちょうどよいとする割合は全体では 36%であり、「少ない（計）」と答える学生はほとんどいない。

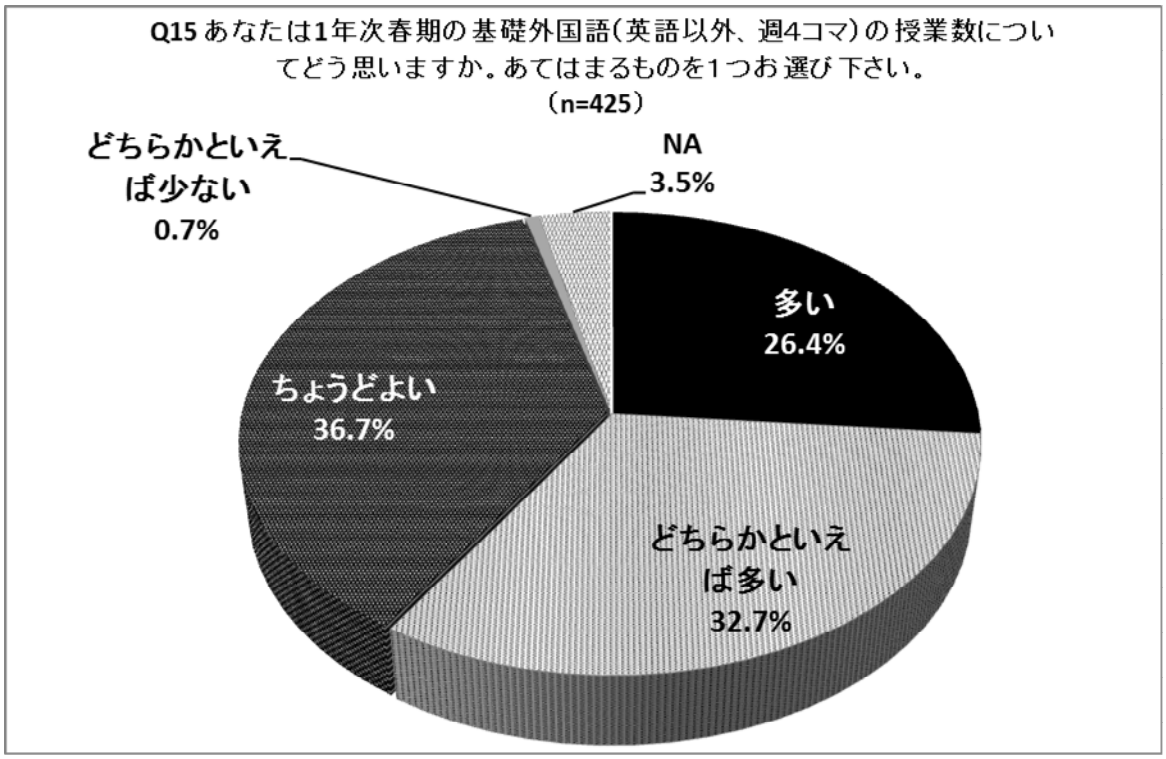

図 7　問 15　基礎外国語のコマ数

本調査回答者の基礎外国語の選択の履修状況としては、フランス語の割合が最も高く 25%である。ついで中国語が 24%、ドイツ語が 20%である。

基礎外国語の選択理由としては、「その言語が使用される国の文化に興味があったから」49%、「その言語自体に興味があったから」47%、「国際社会において重要な言語であると思ったから」35%であった。

ここで言語の選択理由と問 16 の履修言語のクロス集計を行い、履修言語ごとの選択理由の割合についてみてみよう（参考表 3-1）。ここからは言語による選択理由の特徴が明らかになる。

中国語とスペイン語履修者の場合、「国際社会において重要な言語であると思ったから」の割合が他言語の履修者での割合に比べて高い（中国語：文構 69%・文 71%、スペイン語：文構 48%・文 57%）。中国語については「就職に役に立つと思ったから」の割合が他言語に比べて高い。

他方、「その言語が使用される国の文化に興味があったから」はフランス語（文構 44%・文 73%）、ドイツ語（文 58%・文構 55%）、ロシア語（文構 80%・文 53%）、あるいは文

構のイタリア語履修者（71%）などヨーロッパ諸語において高い割合である。

また、フランス語（文構 19%・文 13%）、ドイツ語（文構８%・文 19%）は２年生以上の論系・コース進級に必要だと考えて選択する学生が他の言語より多い。

基礎外国語の学習をとおして身についた能力の結果は、英語とは対照的である。初学者として必要な能力である「文法の理解」(91%)、「リーディング能力」(80%)、「ライティング能力」(70%）に関して「身についた（計)」とする回答の割合が高い。他方、「リスニング能力」、「スピーキング能力」については「身についた（計)」(「とても身についた」と「ある程度身についた」の合計）と「身につかなかった（計)」(「あまり見につかなかった」と「まったく身につかなかった」の合計）の割合の差が小さく、身についた学生の割合は低くなる。「身についた（計)」の割合は、特に「リスニング能力」・「スピーキング能力」ともに 55%と半数強である。また、いずれの項目においても文化構想学部の学生の方が「身についた(計)」の割合は高い。この結果は昨年度調査のものとは異なる傾向である。

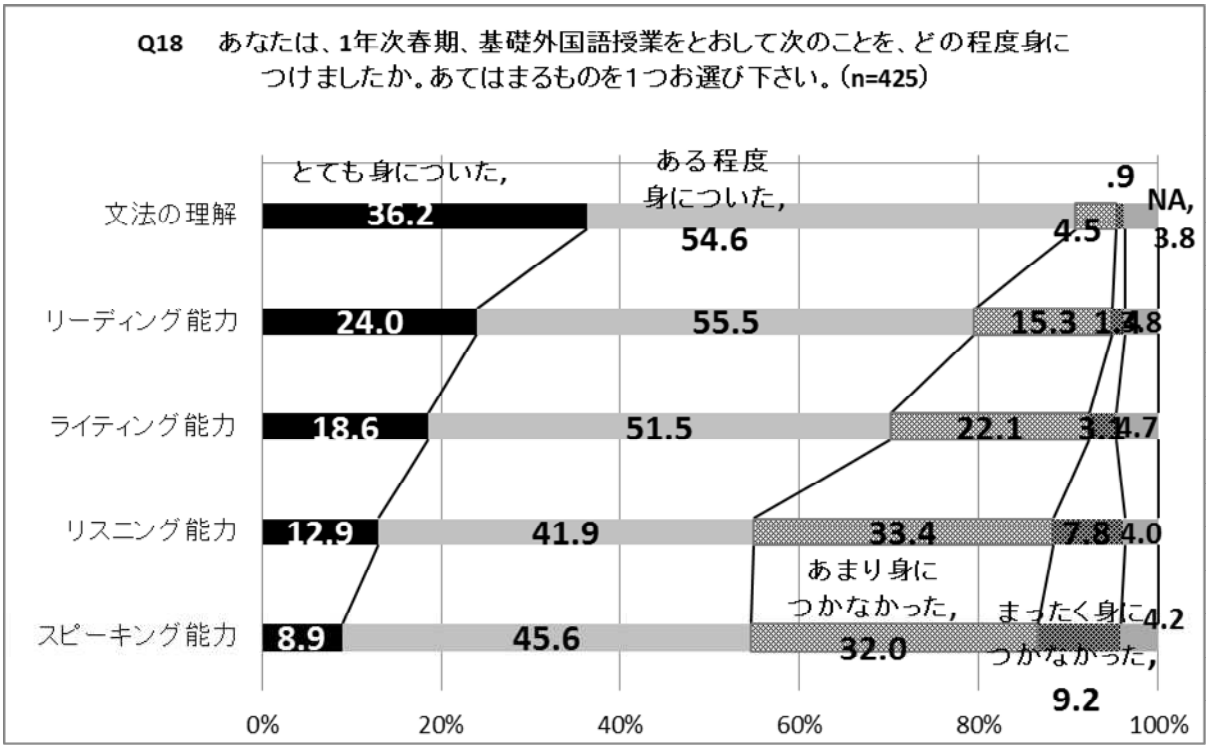

図 8　問 18　基礎外国語の授業を通じて身につけた能力

【問 19：自由回答：付録④】

自由回答では、計 123 件の意見がよせられた。英語に対しての自由回答と比べると全体的には好意的な意見が多くみられる。付録においては履修科目ごとにまとめてある。

最も意見がよせられたのは週のコマ数についてである。週４回で１年のみの必修という現在の形態については、大学から新しい言語と学ぶという点においては肯定的な意見がほとんどである。否定の意見でも、他の科目（英語など）とのバランスの点から多すぎるというものであり、語学学習のためには週４コマは必要であるという共通認識は多くの意見に共通してみられた。また、「１年次のみが必修なのではなく、２年次以降も継続して必修であったほうが忘れないのでは」、という意見も見られた。

複数教員が担当をする授業方式については授業ごとに重点の置かれ方が違うため、バラ

ンスの良い学習が可能になったと評価する意見は多くよせられた。他方、「教員同士の連携が取れていない」というケースや、クラスあるいは語学ごとに内容・レベル・課題の量に差異がありすぎる場合についての指摘もなされた。他方、科目や授業によっては「レベルが高く課題量も多いためついていけなかった」という学生からの意見もあった。

また、テキストや問題集など副教材について改善やより良いものの使用を求める声も複数あがった。

3-5　選択外国語（３・４年生対象）

【問 20～24:表 3-22～26】

選択外国語は３・４年の 62%の学生に履修経験があり、10%が履修への関心を示している。両学部とも３年は「履修したことがないがこれから履修したい」とする学生が４年よりもわずかに高い。

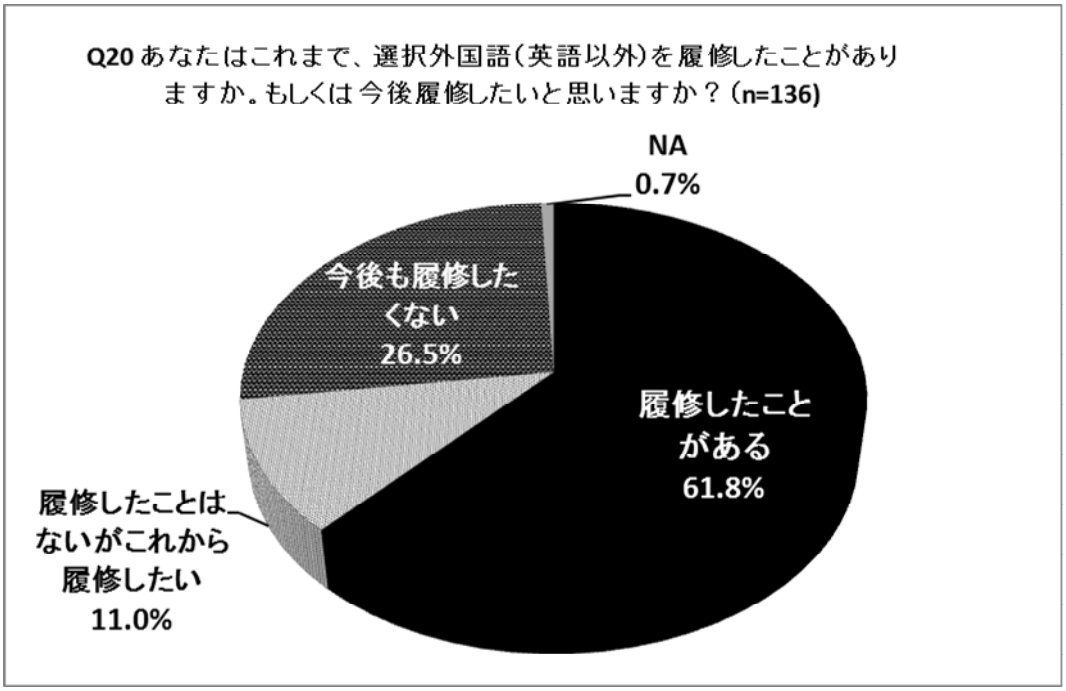

図 9　問 20　選択外国語の履修状況

選択外国語の履修理由としてはその言語への興味（「その言語自体に興味があるから」62%）や、背景文化への関心（「その言語を用いている国や文化に興味があるから」55%）が理由としてあげられている。また、文学部では「論系・コースでのカリキュラムで必要だから」とする回答の割合が文化構想学部に比べてわずかに高いという特徴をもつ（文学部 14%、文化構想学部 10%）。他方、文化構想学部４年で「資格取得のため」33%、「就職のため」29%と高い。

選択外国語の履修を通じてレベルアップが図れたかという問いに対して、「期待以上に達成できた」8%、「ほぼ期待とおりに達成できた」49%であり、あわせて 57%にのぼる。

他方、選択外国語履修をしたくない理由では、「語学が苦手だから」50%と半数である。

ついで「時間的余裕がない」56%である。

また、選択外国語の開講科目については、「スピーキング科目」への要望が最も高く 54%である。ついで「2 年生以上からでも学べる入門科目」への要望の割合は 49%であり、必修の外国語の科目では補いきれない面を選択基礎外国語で補強したいという学生の傾向が読み取れる。この傾向は特に文化構想学部 4 年で高い。加えて「リスニング科目」が 38%と三番目に多いことから、独学の難しい音声分野での語学能力の強化ができる科目を望む学生が多いということもいえる。この傾向は例年とおりである。

【問 25：自由回答：付録⑤】

選択外国語についての自由回答には計 45 件がよせられた。この自由回答記述においては、設置科目への具体的な要望を書いた学生が最も多かった。また、設置時限の偏りについて指摘する意見や、オープン科目との連携を提案する意見もあった。さらに、選外となりがちであることへの不満も複数よせられた。全体としては設置科目や選択可能な科目の少なさを指摘する意見もみられたが、他の学生も積極的に選択外国語科目を履修してほしいという意見を述べる学生が多い傾向が見られた。

3-6　開講科目

【問 26・27：表 3-32～33】

学部の開講科目群の満足度については、「非常に満足している」19%、「まあ満足をしている」69%であり、両者の合計した「満足している（計）」は 88%であり、全体として例年とおりの高い満足の傾向がみられる。文化構想学部（23%）のほうが文学部（14%）よりも「非常に満足している」の割合が 10 ポイント近く高い。

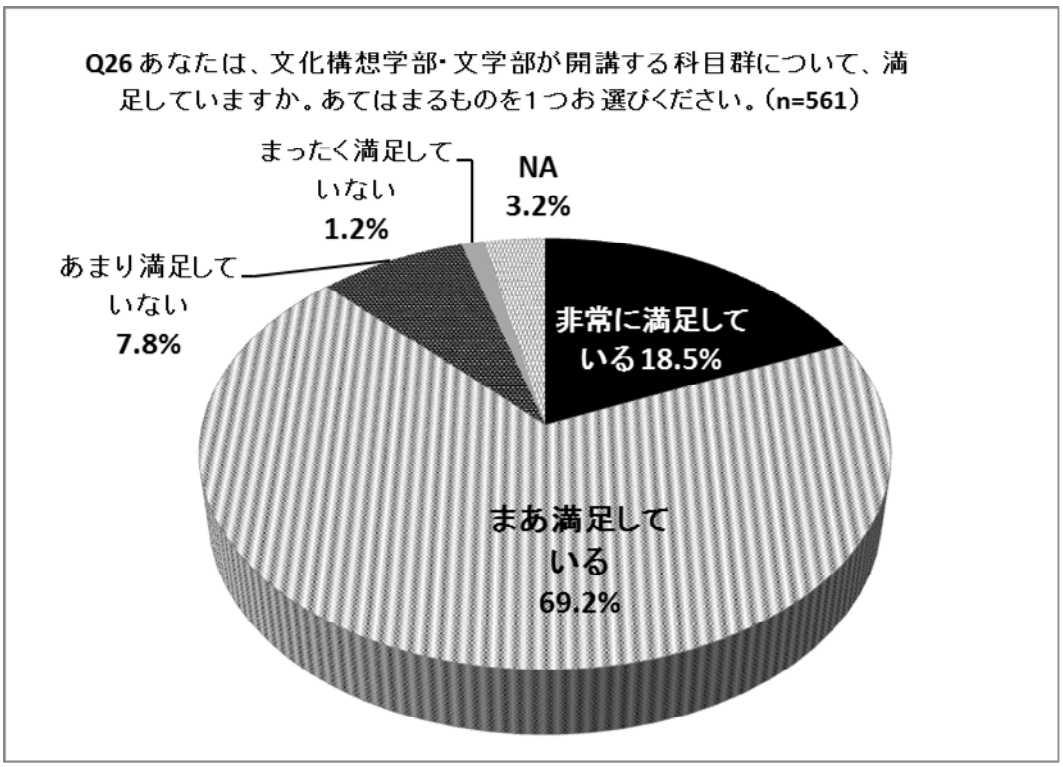

図 10　問 26　開講する科目群への満足度

不満の理由については、「設置されている科目のバリエーション（分野・テーマなど)」の割合が最も高く 42%であり、これは文化構想学部のほうが 48%と高い。ついで「自分で選択をできる科目の選択肢」が 16%と続く。

第４章　文化構想学部：進級、専門教育

4-1　論系への進級

【問 28～30：表 4-1～3】

現在の１年生のうち９割以上が２年時からの所属希望論系を決めている。進級希望論系については、表象メディア論系が 19%と最も高いが、おおむね希望はばらついている。また「まだ決めていない」とする学生は９％である。

また、現在の希望論系が入学時に希望していた論系と同じと回答をした学生の割合は 64%であり、23%の学生は入学してから希望が変わり、「入学時には特に決めていなかった」学生は 13%という回答であった。

進級する論系を決める際に重視することは「自分の関心のあるテーマを学ぶことができるか」と回答する学生の割合が 95%と群を抜いて多い。ついで「所属教員が充実しているか」35%、「専門科目が充実しているか」31%である。このように、ほとんどの学生は自身の関心から希望する論系を選択していることがわかる。さらに「その他」によせられた自由回答（10 件）をみると「学部のパンフレット」という回答がいくつかみられる。

【問 31：表 4-4～7】

現在論系に所属をしている２年生についてみてみよう。所属論系を決定する際に参考にした科目について、４つの設置科目から選択をしてもらった。「非常に参考になった」と学生たちが回答した比率がもっとも高いのはブリッジ科目の 19%であった。ブリッジ科目は「参考になった」とあわせた「参考になった（計）」でも 64%と高い割合を示す。ついで基礎講義の「参考になった（計）」は 54%であった。それに対して残りの「基礎外国語」（74%）・「英語」（86%）という語学科目は「参考にならなかった（計）」が半数をこえる。この結果から学生たちは、論系ごとの特色がみえるブリッジ科目や基礎講義を参考に論系所属を決めるという例年とおりの傾向がみられた。

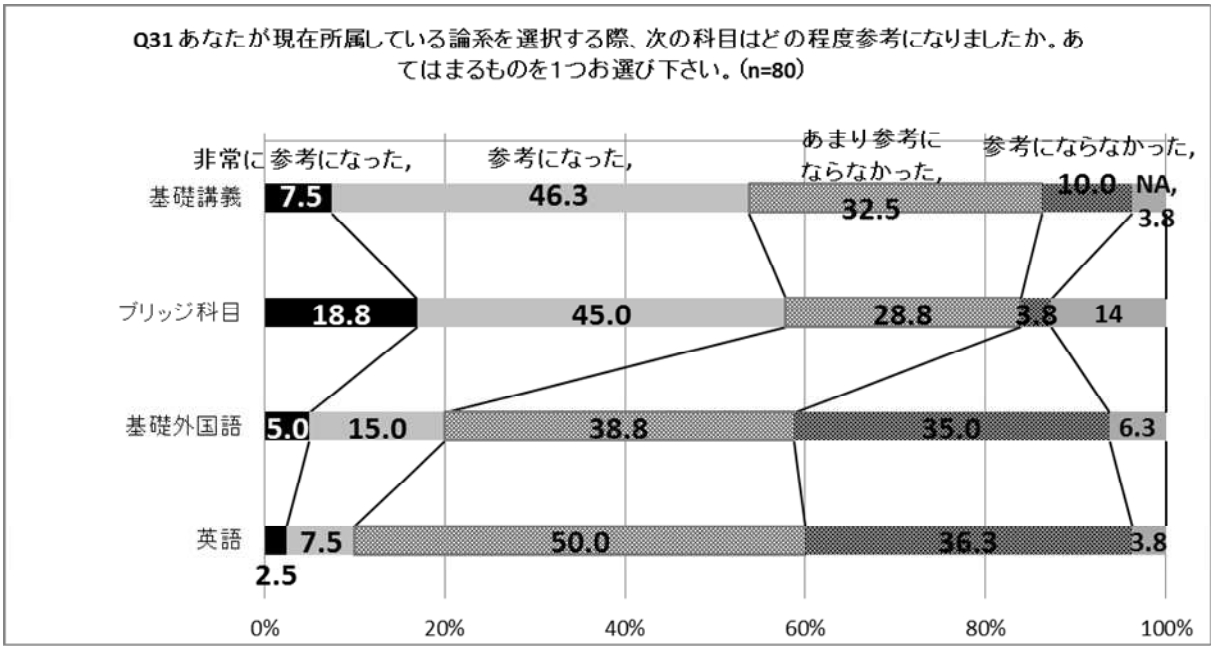

図 11　問 31 論系所属決定時に参考にした科目

【問 32～36：表 4-8～12】

現在２年生のうち、所属論系については 85%の学生が現在の所属論系について第一希望のものであると回答をしている。

ただし、入学時に希望していた論系と同じだとする学生は 43%である。つまり残り半数の学生は、入学時に希望していた論系と異なる論系に所属しているか（30%）、あるいは入学時には特に所属希望の論系を決めていなかった（23%）、ということがわかる。

現在の論系を決める際に活用した情報としては「論系のガイダンス」53%、「論系の HP」48%、そして「基礎講義の内容」45%と、各論系が公式に出す情報を参考に所属論系を決めた学生が多い。ついで「論系の教員や助手の話」（28%）あるいは「論系に所属する学生の話」（23%）など、現在論系に所属をする人々の話も進級論系決定の参考にされていた。「その他」の自由回答（計８件）では、学部のパンフレットや、所属教員の教員検索 HP（研究者情報ページ）、所属教員の授業などがよせられた。また既に学びたい学問を決めていたからという意見もあった。

また、所属論系を決める際の重視点では、現在進級を考えている１年生とも、そして昨年度調査の１年生（現在の２年生が１年生の時に回答）同様の結果がみられる。「自分の関心のあるテーマを学ぶことができる」88%がもっとも高く、ついで「所属教員が充実している」（28%）と「専門科目が充実している」（23%）という制度面での充実を重視する意見が続く。

さらに現在所属する論系に「非常に満足をしている」２年生以上の学生は 29%であり、高学年ほど「非常に満足をしている」と回答をする学生の割合が高い。４年生では 40%にのぼる。また、「まあ満足をしている」とあわせた「満足している（計）」の割合は 80%であり、多くの学生は現在の所属論系に満足をしている。

4-2　専門教育

【問 37～44：表 4-13～19】

現在の２年生でゼミ所属希望を既に決めている学生は 78%であり、４人に３人である。ただし「まだ決めていない」とする学生が 15%であり、卒業研究を積極的に希望する学生は４%のみである。これは例年とおりの結果である。

３・４年生でゼミ所属の学生は 87%であり、卒業研究を選択した学生は 11%である。また現在の所属ゼミは８割以上の学生が第一希望であると回答をした。所属ゼミを決める際に学生が重視した点は「ゼミのテーマ」93%であり、ついで「担当教員との相性」60%、「ゼミガイダンスの印象」36%と続く。学生はゼミ選びの際に、そのゼミが掲げるテーマを選択基準におくことに加えて、担当教員との相性やゼミガイダンスの雰囲気など、自身がそのゼミに所属をした際になじめるか（居心地がよいか）ということを重視する傾向があるが、これは例年とおりである。

一方、所属ゼミを決める際に論系プログラムを活用したと回答をした学生は「大いに活用した」と「ある程度活用した」をあわせた「活用した（計）」でも 30%である。さらに「履修モデルを知らなかった」と回答をした学生の割合は 21%である。ただし、３年生では「活用した（計）」が 38%と４年生より 18 ポイント高く、「履修モデルの存在を知らな

かった」については４年生が 20%と３年生より４ポイント高い。ここから論系プログラムの履修モデルが広まりつつあるという推測ができる（ただし文化構想学部３年生の回答者数が少ないことには留意が必要である）。

ゼミ論文のテーマ決定については、当然のことながら３年生と４年生の間で回答の差が大きい。「具体的なテーマや内容について決まっている」とする３年生は７％にとどまるのに対し、４年生では 44%と半数の学生は具体的なゼミ論のテーマまで決めている。３年生では「いくつかのテーマを考えている」が 19%、「テーマについて考えてはいるが、まだ決まっていない」が 22%と、考えてはいるものの定まっていない傾向にあるといえる。

さらに、ゼミへの満足度は「非常に満足をしている」が 53%と昨年度の 43%より 10 ポイントほど高い。さらに、「まあ満足をしている」は 48%であり、９割以上の学生が所属ゼミに満足をしている。なお、「まったく満足していない」と回答した学生はいなかった。

ゼミの内容や方法については自由回答において計 10 件の意見がよせられた。おおむね満足しているという意見であったが、「ゼミの延長に伴う時間も単位数として計算してほしい」、「論系内であってもゼミごとに分断している印象がある」などの意見もよせられた。

【問 45～47：表 4-20～22】

回答者が７名と少数ではあるが、卒業研究を選択した学生についてみよう。卒業研究の選択理由としては「自分の関心にあったゼミがなかった」や「卒業研究としてまとめたいテーマがあった」、など、自身の研究関心から積極的に卒業研究を選んだ学生が多い。また、「ゼミという制度を好まなかった」や「ゼミを希望したが入れなかった」ために卒業研究を選ぶ学生もいる。また、半数の学生は卒業研究のテーマについて既に決まっていると回答していた。

第５章　文学部：進級、専門教育

5-1　コースへの進級

【問 48～51：表 5-1～7】

現在の１年生は全体の９割近くが進級希望コースを決めている。入学時に希望していたコースと同じである学生の割合は 58%であり、文化構想学部よりも低い割合である。「違う」と回答した学生が 31%にのぼることが特徴的であるといえる。

また、進級するコースを決める際には、「自分の関心のあるテーマを学ぶことができるか」の割合が 95%であり、ほとんどの学生が重視する点である。ついで「専門科目が充実しているか」40%、「所属教員が充実しているか」36%であり、文化構想学部と同様の傾向がみられる。

続いて２年生以上についてみてみよう。コース選択の際に参考になった科目については、「ブリッジ科目」の割合がもっとも高い。「非常に参考になった」は 12%であるが、「参考になった」とあわせた「参考になった（計）」は 48%である。参考になったとする「ブリッジ科目」でも半数を超えておらず、昨年度の文学部の回答よりも、また本年度の文化構想学部の回答よりも低いことがわかる。「参考になった（計）」をみると、２番目に割合が高いのは「基礎講義（47%）」であり、以下語学科目は「基礎外国語」（16%）、「英語」（13%）とほとんど参考になっていないことがわかる。

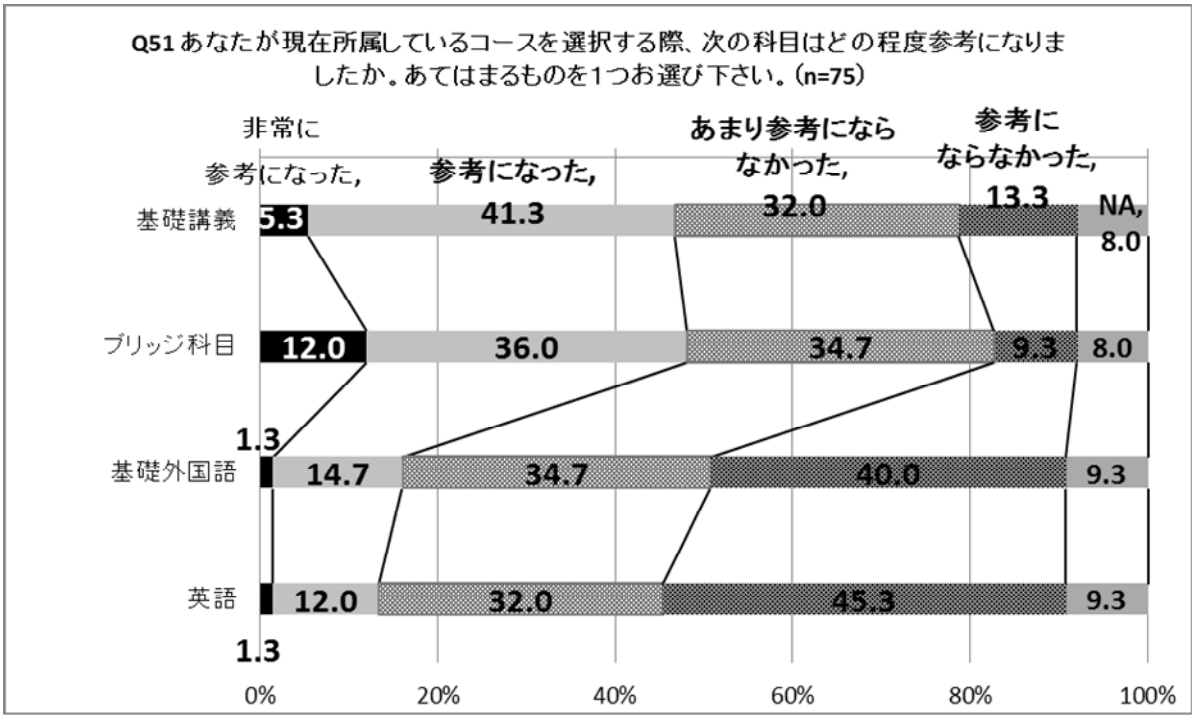

図 12　問 51　コース所属決定時に参考にした科目

現在２年生で、所属コースが第一希望であるものは 86%である。この割合は昨年度と同じである。

また、２年生の 56%が入学時に希望をしていたコースに所属をしていると回答した。

コース進級の際に活用とした情報としては、「コースのガイダンス」と回答をした学生の割合がもっとも高く 48%である。ついで「基礎講義の内容」29%、「コースの HP」15%であった。文化構想学部は「論系の HP」が一番高かったが、文学部ではガイダンスが一番高い割合であるまた、自由回答（計 16 件）では、そのほか入学以前からの自分の興味や関心にもとづくという学生からの回答もあった。

さらに、コース進級の際に重視された点は「自分の関心のあるテーマを学ぶことができる」が 76%ともっとも高い。文化構想学部と同じ傾向であるが、文学部の方がその割合は低い。さらに文学部の場合はついで「専門科目が充実している」30%、「所属教員が充実している」16%と続く。2 番目と 3 番目の順番については文化構想学部と逆になっている。この点に両学部の特色が出ているといえる。文化構想学部の学生の場合は所属論系を「教員」で選ぶ傾向が強いのに対し、文学部の場合は「カリキュラム」を重視する学生の割合が相対的に高い。これは去年も同様にみられた傾向である。

5-2　卒業論文・満足度

【問 56～57：表 5-12～16】

卒業論文のテーマ設定の進度は、３年生では半数近くがテーマを考え始める段階であり、「具体的なテーマと内容は決まっている」は３％にとどまる。他方、４年生になると、「具体的なテーマと内容は決まっている」と「大体のテーマや方向性は決めている」に回答が集中し、学年が進むにつれて研究テーマや関心が定まることが明確にあらわれている。

所属するコースへの満足度については、４つの項目全てにおいて「満足している（計）」の割合は７割前後である。「非常に満足をしている」の割合がもっとも高いのは「B. 現在履修している演習」であり、26%である。また、「非常に満足をしている」の割合は高学年ほど高くなる傾向がみられる。「まあ満足している」はいずれの項目も半数程度にのぼる。

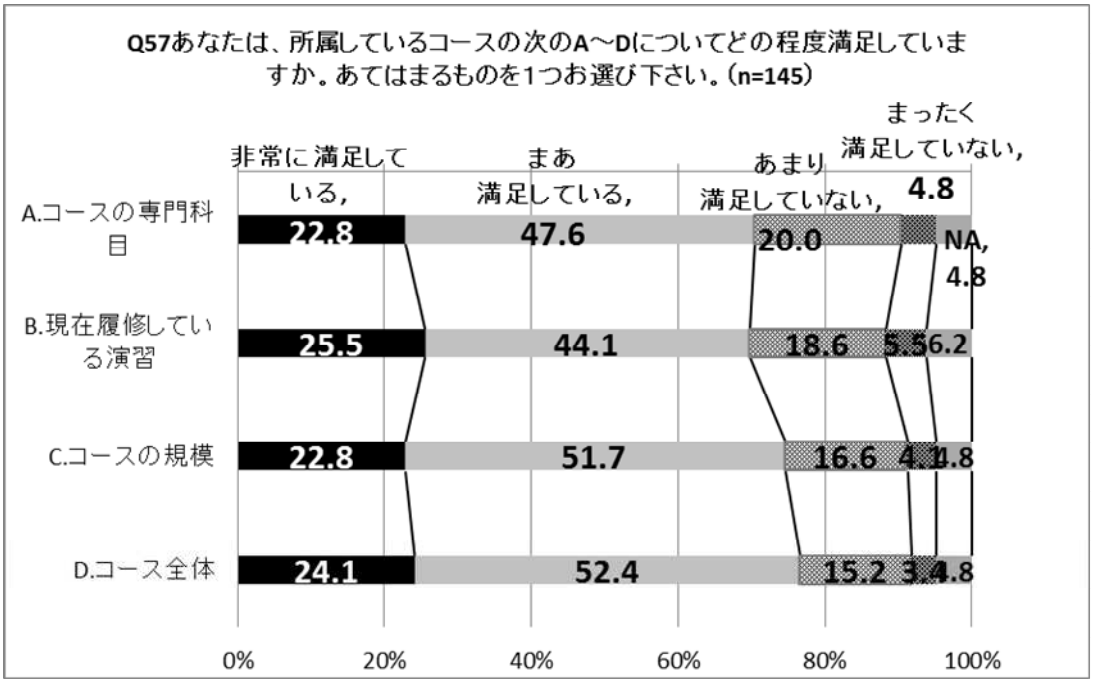

図 13　問 57　コースへの満足度

第６章 キャンパスでの生活：施設利用・学習環境・大学への愛着

6-1　留学・授業外での学習状況

【問 58～59：表 6-1～2】

２年生以上に留学経験の有無をたずねたところ、全体で 13%の学生が何らかのかたちで在学中に留学を経験していた。文学部３年と文化構想学部４年でその割合は 23%ともっとも高い。

また、今後留学したいかどうか、という問いに対しては、全体では 44%の学生が「留学したい」と回答をした。学部間の差はほとんどみられない。また、両学部とも２年生で「留学したい」と回答する学生の割合が高い（文化構想学部 47%、文学部 52%）。

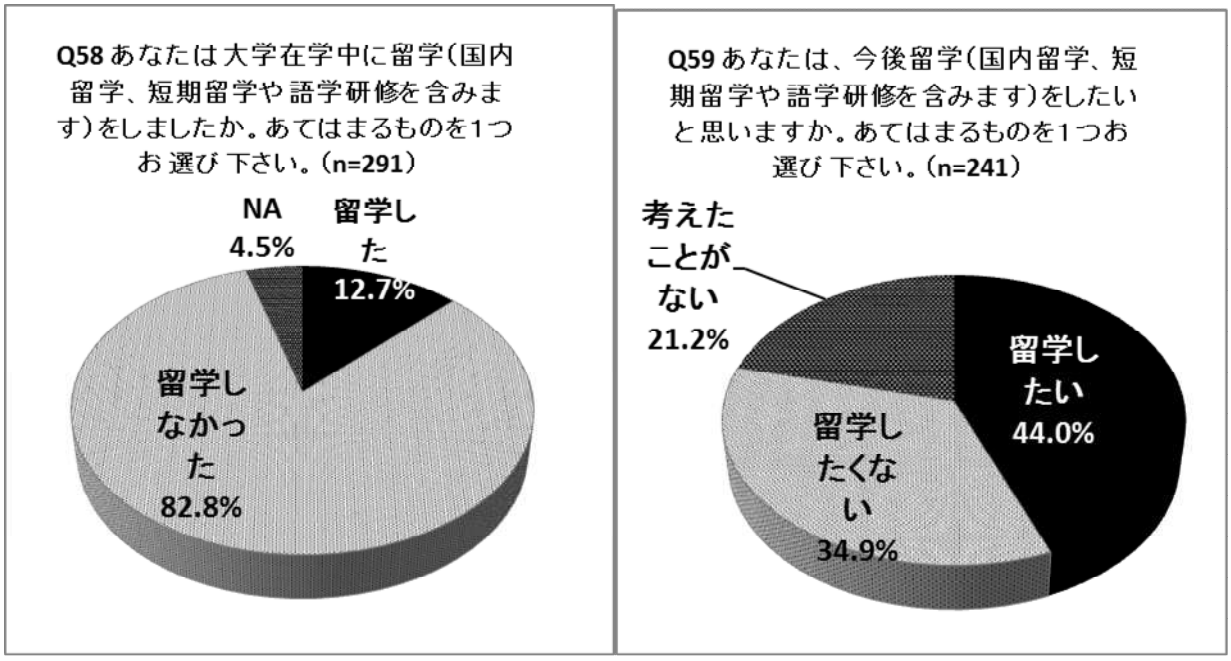

図 14　問 58・59　留学経験の有無、留学希望について

【問 60～78：表 6-3～5】

まず、大学の授業以外の学習時間についてみてみよう。全体では「６～18 時間」（１日平均約１～2.5 時間）が 48%ともっとも高く、次いで「５時間以下」38%、「19～27 時間」９%、「28～36 時間」２%であった。学年別だと低学年ほど学習時間が多い傾向がみられる。高学年でも週 19 時間以上学習している学生は一定数いるとはいえ、低学年の場合、必修の語学の予習復習をしなければならないため、学習時間は多くなるからだと考えられる。

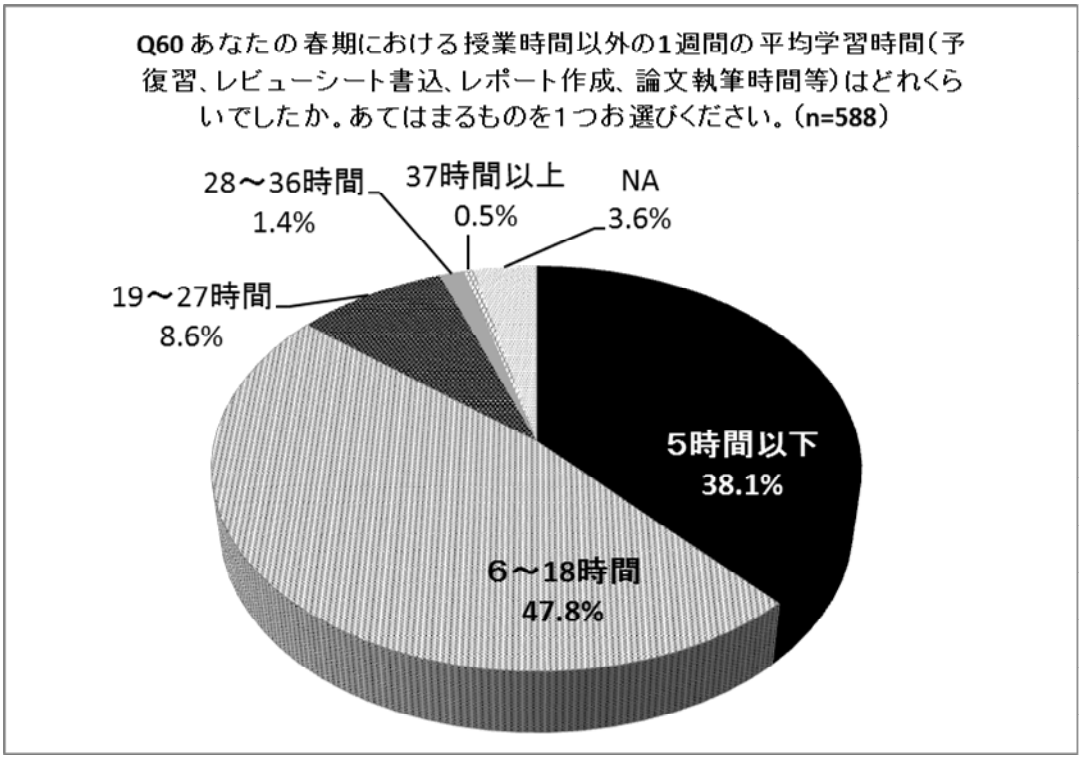

図 15　問 60　１週間の平均学習時間

ついで、春期１ヵ月平均での読書冊数については、１ヵ月で「１～２冊程度」37%、「３～４冊程度」25%と昨年同様の傾向がみられた。高学年ほど３、４年生で読書冊数量が増加する傾向がみられ、特に文学部４年での読書量の多さは顕著である。これは卒論執筆時期にさしかかっているからだと考えられる。

さらに、書籍を購入した金額についてみると、「1,000～2,000 円未満」と回答をした学生の割合が 24%ともっとも高く、それに「1～1,000 円未満」23%がと続く。「1,000～2,000 円未満」を冊数（新刊購入の場合）に置き換えてみれば、新書や文庫であれば月に２～４冊、単行本であれば月に１～２冊を購入しているということになる。１年生では本を買う学生は多くない。しかし両学部とも３・４年生では、両学部とも半数近い学生が書籍購入に月 2,000 円以上をかけており、高学年の方が書籍購入金額は高い傾向がみられる。読書冊数に比べて購入金額の方がより顕著に高学年の方がその割合が高いという傾向があらわれる。これは所属したゼミや演習、あるいはゼミ論文や卒業論文のために読むべき本が学生のなかで定まってきていることに加えて、高学年になるほど興味を持った本は積極的に購入するようになる傾向があることが推測することができる。この結果は昨年度もみられたが、本年度も引き続きみられる特徴である。

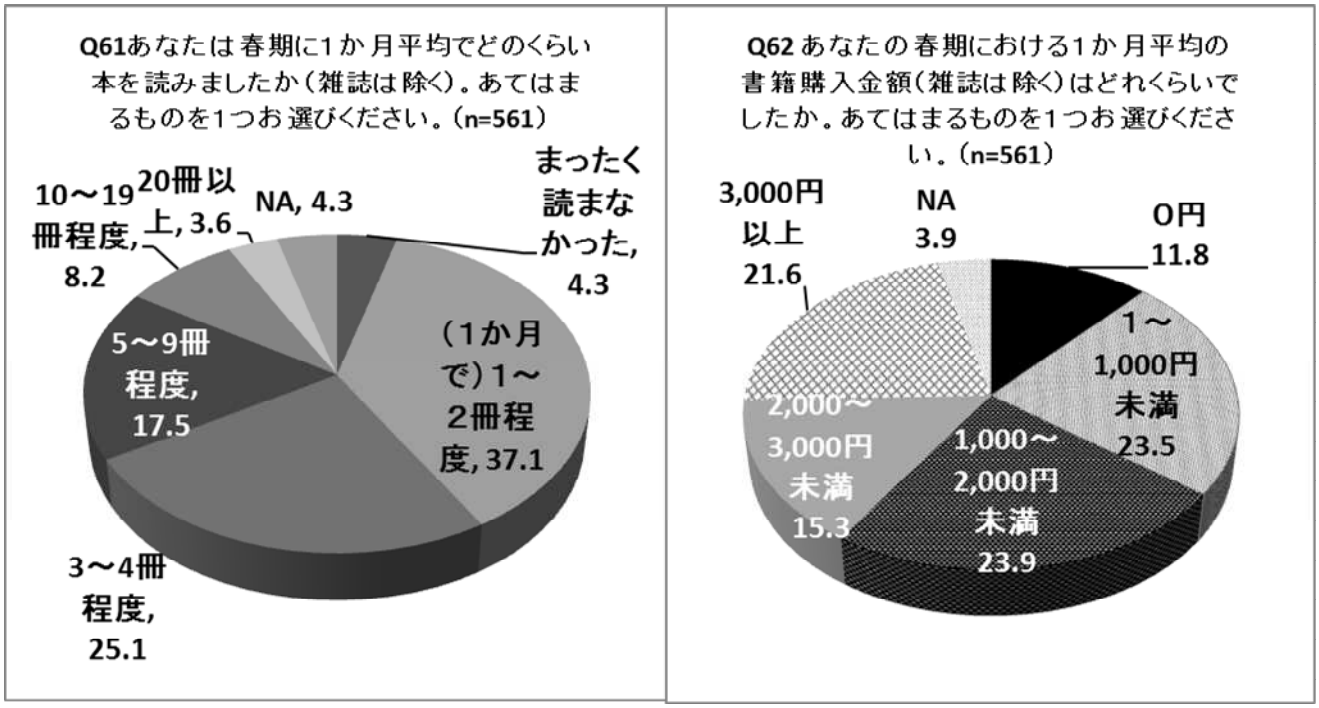

図 16　問 61・62　1か月平均の読書冊数・書籍購入冊数

6-2 大学施設等の利用

【問 63：表 6-6～14】

本節においては問 66 の自由回答によせられた回答も適宜参照をしながら結果をみていきたい。

まず学内施設の利用に関しては、例年とおり戸山キャンパス内にある施設の利用頻度の高さがうかがえる。９つの場所のうち、「ほとんど毎日」の割合がもっとも高いのは、「H.戸山カフェテリア」であり、週１回以上利用する学生の割合は 66%にのぼる。次いで利用頻度が高いのは「H.戸山カフェテリア」で週１回以上利用する学生の合計の割合が最も高いのは「B.戸山図書館」であり 72%である。さらに「G.戸山キャンパス生協」も週１回以上利用する学生は 54%と高く、「D.戸山キャンパス PC ルーム」の場合は 45%である。

他方でも、「I.ミルクホール」の利用を週１回以上と回答した学生が 23%と他の戸山キャンパス内施設に比べて低い。さらに「C.保健センター戸山分室」については週１回以上利用する学生はほぼいない。自由回答の中には保健センター戸山分室の存在を知らない学生の声もよせられた。

また、本部キャンパスの施設の利用頻度は戸山キャンパスの施設に比べて利用頻度は低い。「A.中央図書館」の場合、「週１回以上」の割合は 24%であり、「２週に１回程度」とする学生が 16%である。また 22 号館端末室と本部キャンパス生協を週１回以上利用する学生の割合は１割以下である。

どの施設も低学年ほど利用頻度が高い傾向がみられる。低学年のうちは必修授業も多いため、空き時間を学内施設で過ごす学生の割合も高くなるのだろう。

では、問 66 の自由回答によせられた意見のうち、問 63 であげられた学内施設に関する

ものについて特筆すべき点を確認しておきたい。

まず、戸山図書館については、開館時間の延長やスペースの少なさなどの意見が寄せられた。また、戸山カフェテリアについては、室内座席数の少なさ、（特に夏場の）温度上昇や直射日光への不満の声が多く寄せられた。

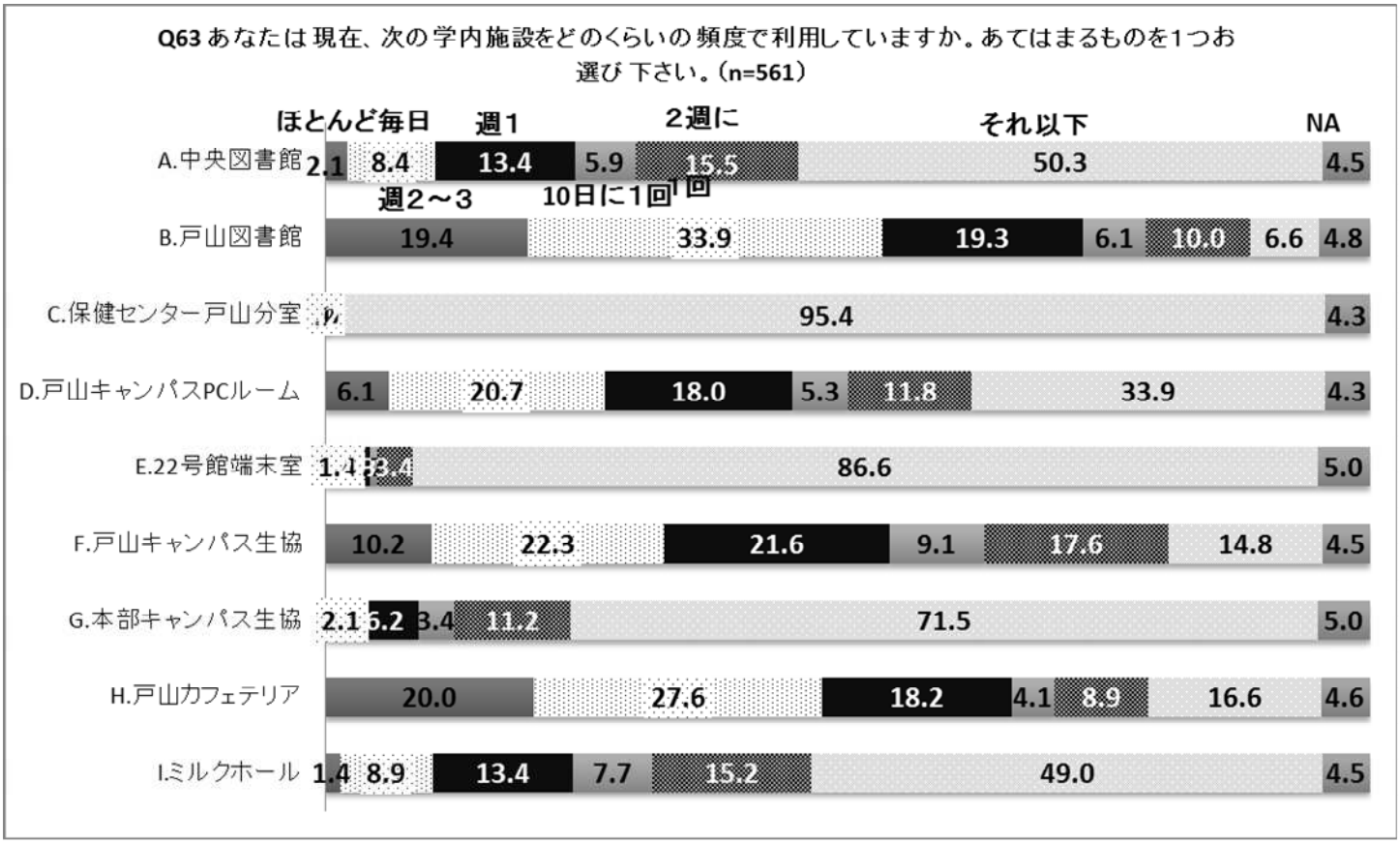

図 17　問 63　学内施設の利用状況

6-3　33 号館高層棟の利用状況、環境評価

【問 64・65：表 6-15～22】

本年度は 33 号館高層棟の使用状況についての質問項目が追加された。昨年度までの学内施設の使用状況や環境評価と比較しながら、みていきたい。

まず、33 号館の使用状況について、全体では 7 割の学生が「使用した」と回答している。文化構想学部で 75%と割合が高い。特に論系室が多くあることから、３・４年生はゼミなどで利用する機会が多いものと思われる（文化構想学部３・４年生では利用経験者は全体の８割を超える）。また、文学部では１年生の利用者の割合が 79%と最も高い。

ついで、教室環境について６つの観点にもとづいて質問がなされた。まず、「A.教室内の温度」については「ちょうどよい」が半数ではあるが、「寒い（計）」30%であり、「暑い（計）」の 13%を上回る。これは調査時期（７月）と考慮すれば、教室内の冷房（空調）については強い（寒い）と感じている学生が多いということがいえるだろう。

他方、「B.照明の明るさ」と「C.教室の音声の聞き取りやすさ」については、それぞれ「ちょうどよい」とする学生の割合が 86%と 89%であり、ほとんどの学生は問題を感じていな

いことがわかる。

次に、「D 受講生の数と教室の大きさのバランス」については「ちょうどよい」とする学生は 47%に留まり、「座席数が少ない（計）」とする学生が 43%と座席数の少なさへの不満がみられる。

設備の状態についてみると、「E.論系室・コース室の状態」は「論系室・コース室は利用していない」とする学生が 64%である一方で、「快適（計）」は 33%である。つまり使用経験のある学生のほとんどは快適だと感じているといえよう。「F.ラウンジスペースの状態」についても同様に、「ラウンジは利用していない」学生は 40%、「快適（計）」は 52%であり、おおむね満足が得られていることがわかる。そして「G.建物の状態」については、「快適である」が 41%であり、「まあ快適である」とあわせると 87%である。ただし 1 割強の学生は「快適ではない」という回答をしている。

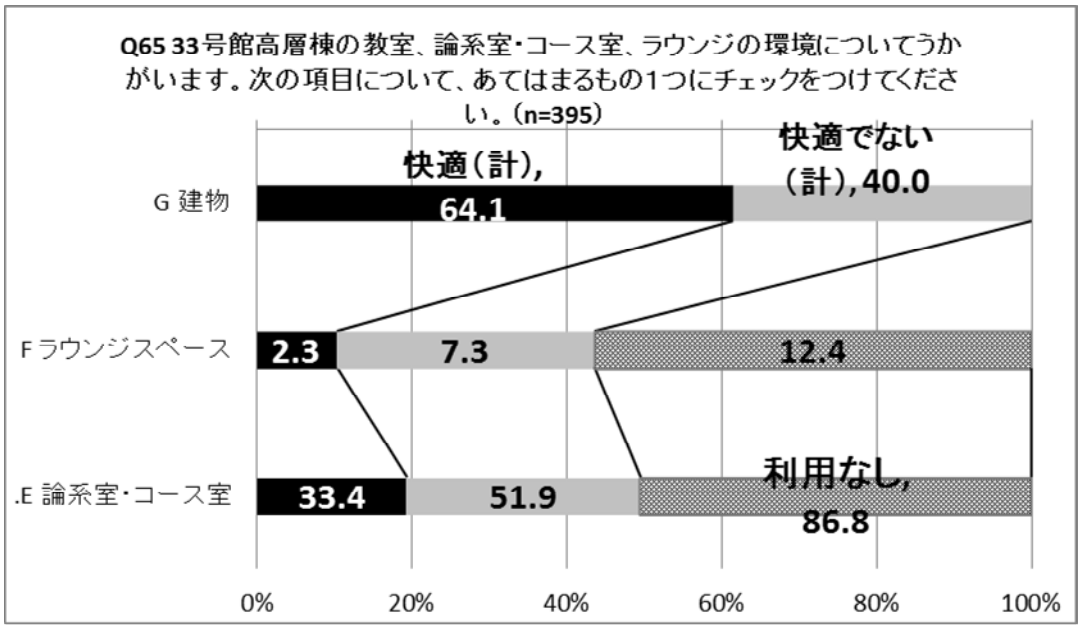

図 18　33 号館高層棟の状態について

33 号館の状況については自由回答に多数の意見がよせられた。なかでも「快適ではない」原因の最たるものは、エレベーターの稼働状況といえよう。問 66 の自由回答のうち、56 件は 33 号館のエレベーターへの意見であった。「奇数階しか停止しない」、「授業前に混雑をする」という現状に対しては多数の学生から不満がよせられた。また、階段についても「狭さ」や「わかりにくさ」、「混雑して使いにくい」ことを指摘する声があり、上下階への移動に苦労を要する様子がうかがえる。

その他 33 号館については、「すべての階にトイレがあるわけではなく不便だ」ということ、「ラウンジスペースがほしい」といった要望がある一方で、「きれい」、「使いやすい」などの高評価の意見もよせられた。

【問 66：自由回答：付録⑥】

戸山キャンパス環境については、計 246 件の意見がよせられた（付録においては、カテ

ゴリーごとに意見を分割して記載した回答もある)。既にいくつかの事項については触れたため、ここではそれ以外のトピックについて確認しておこう。

まず、教室環境については、調査時期が夏であったため、「キャンパス内の冷房の効き方が弱い」場所についての指摘がなされた。特に、「同じ教室のなかであっても効き方にばらつきがある」という意見が複数みられた。また、「戸山カフェテリアの座席不足から一部の教室では飲食は可能になっているが、そのため教室の空気がよどみ、においが気になる」、という意見をよせた学生もいた。

また、喫煙所は本年度から場所が記念会堂横に移動をしたが、移動後の場所への不満が多く寄せられた。昨年度までは戸山図書館脇にあったことから、図書館に行く際に副流煙を吸わざるを得ないという不満の声と、移動を求める声が多く寄せられていた。しかし新たな喫煙所も 36 号館や 39 号館に抜ける際のとおり道に当たるため、移動場所の選択への疑問の声もよせられた。しかし移動後の場所についても、同様に不満の声が多い。喫煙所が記念会堂横に移動したことへの肯定的な意見はなかった。

工事に関しては、「移動しにくい」、「迷う」、「うるさい」、「早く工事が終わった姿をみたい」、といった意見がよせられた。

また、「トイレの少なさ」を指摘する声も多い。「音姫の故障や不調」を指摘する意見もある。他方新しくパウダールームができたことを評価する意見もあった。

さらに、ラウンジスペースの充実を求める意見もあがっている。よせられた意見からは学部生の数に比して使えるスペースが少ないという現状がうかがえる。

6-4　大学・学部への愛着

【問 67・68：表 6-23～24】

早稲田大学への愛着についてたずねたところ、「強く感じている」学生の割合は 35%、「少し感じている」学生の割合は 46%であり、合計すると８割をこえる。学部ごとに大きな差はみられないが、両学部とも４年生で「感じている（計)」の割合が低い。

また、所属学部への愛着についても大学への愛着と同程度であった。「強く感じている」学生の割合は 36%、「少し感じている」学生の割合は 44%である。学部への愛着について所属別にみると、両学部の差は大きくなく、それぞれ４年生で「感じている（計)」が高かった。なお、昨年度調査で、大学、学部ともに、３年生で愛着を感じている学生の割合が最も高かったことと合わせると、2010 年度入学生で大学や学部への愛着が高いと推測できる。